

2-4 アナグマ

【分布】

ニホンアナグマは日本固有の動物であり、タヌキと同様に古くから生息している在来種である（写真2-4-1）。北海道、沖縄を除く広い範囲に生息しており、近年では東京都、神奈川県、千葉県など首都圏周辺での生息情報も多い（図2-4）。過去には県のレッドデータブックで準絶滅危惧種に指定されていた地域でも、近年生息が確認されるようになり、レッドリストから外されている地域が増えている。

【生息環境、形態的特性、基本生態】

アナグマは林内の斜面地に巣穴を作る傾向にあるため、生息には丘陵地の山林にアクセスしやすい緑地を必要とするケースが多いとされていたが、都市化が進んだ地域の小規模緑地でも生息が確認されており、人家や交通量の多い道路から近い林縁にも繁殖用の巣穴を作る場合がある。中型獣類の中では、かつては希少な動物とされていたが、都市近郊でも生息や繁殖が確認されていることから現在では身近な動物の一つと言える。

体の大きさは鼻先から尾の先まで60～90cm程度であり、体の大きさはメスよりもオスの方が大きい。地域によって若干の期間の違いはあるが、11月から4月にかけて冬眠する。最長7ヶ月に渡る冬眠を巣穴で乗り切るために、冬に向けて脂肪を溜め込むため、体重は4～15kgと幅広く変化する。穴を掘る能力が優れており、複数箇所に巣穴を掘り、ねぐらや繁殖場所とする（写真2-4-2、2-4-3、動画1）。その穴掘り能力を支えるため、頑丈なくさび形の体に小さな頭部と長い鼻



写真2-4-1 アナグマ



図2-4 アナグマの分布(環境省)



写真2-4-2 竹林内の巣穴



写真2-4-3 草地の巣穴

先、太く短い首、短い足をしており、扁平な体つきである。また、四肢には長く鋭い5本のかぎ爪を持っている（写真2-4-4）。顔は全体が白く頭部から目の下にかけて黒い模様があるため、鼻筋が白いという点でハクビシンに間違われることも多い（写真2-4-5）。

雑食性で様々なものを食べるが、ミミズを主な食料資源としている。ミミズなどの土の中の



写真2-4-4 扁平な体つき



写真2-4-5 白い頭部に目の縦ラインが黒い毛色

餌を探す際は、前肢で少し掘りながら鼻先をねじ込む行動をとる（動画2）。直径5cm程度の小さな穴が点々とある場合には、アナグマの餌を探した痕跡である可能性がある（写真2-4-6、2-4-7）。他にも、昆虫類やイチゴなどの甘味のある液果類を好んで食べる。

まだ明らかなでないことも多いが、ニホンアナグマは基本的に単独性、もしくは母子グループで活動している。アナグマは冬眠をすることから、春～夏までの間に交尾を行い、着床遅延後に2ヶ月間の妊娠期間を経て冬眠明けに1～4頭、平均2頭を出産する（動画3）。



写真2-4-6 地面に鼻先をねじ込み餌を探す



写真2-4-7 餌を探した痕跡



薄明薄暮期に活発になるが、アナグマは日中でも見かけることが多い。土を掘る能力に優れている一方で、木登りの能力や狭い通路の移動能力はアライグマやハクビシンに比べると劣る。しかし、慣れれば金網柵を自由自在に上り下りでき、高さ60cmのトタン柵を乗り越えることもできる（写真2-4-8、2-4-9）。また、ぶどう棚の上に登ってぶどうを食害していたという報告もあるため、「登れない動物」という思い込みは危険である。

写真2-4-8
アナグマがよじ登って
乗り越えたトタン柵

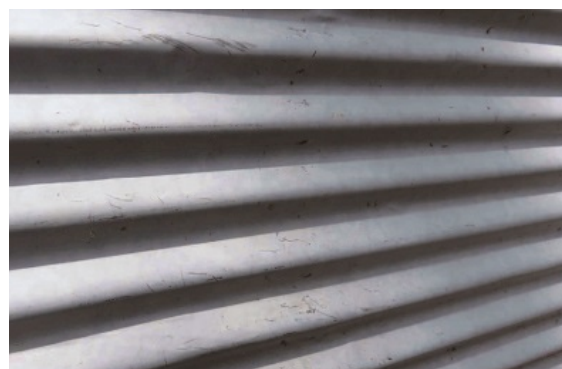


写真2-4-9 トタンに残ったアナグマの爪痕



動画1_巣穴掘り



動画2_餌を探す



動画3_親子